

隨泉寺寺報

2001 年 3 月号

第 368 号

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 法性寺住職 高都持 正文師

講題 自身に気づく

み仏の まゆ眉ゆるやかに はなあんず花杏 (永方 裕子)

春を思わせるような温かい日が続いたかと思うと、今朝は一面の雪化粧です。これから温かい日と寒い日を繰り返しながら、春は来るのでしょうね。梅の花も終り、桜の花が咲くまでのこの時期、目を楽しませてくれるのは、桃や杏の花です。杏の花を遠くから眺めると、枝に伸びた木にほんのり紅色がかかり、じつに美しい。それはまるでみ仏の眉のようです。奈良の薬師寺の観音菩薩様のおすがたを思い出します。やわらかで慈悲の御心がにじみ出ているような美しいおすがたです。杏の花の緩やかな枝先がみ仏の眉のようです。私はこの杏が大好きです。もっとも食べれる実の方ですが。彼岸がやってきます。厳しい寒さをしのいでじっと耐えてきた花々も、明るいひかりに照らされて、美しい花をつけます。この美しい時こそ、自分自身の相をもう一度見なおし、ほとけ様の教えに耳を傾けるのが、聖徳太子が願われた彼岸の本来の意味でしょう。今回の御講師は昨年連続研修でみなさん方と一緒に参りした佐伯町浅原の法性寺の御住職です。どうぞこぞってお参りください。

3月の法座予定

3月14日昼席午後1時より……………彼岸法座

3月14日夜席午後7時半より……………出張法座 上平原

3月15日朝席午前10時より……………彼岸法座

3月15日昼席午後1時より……………彼岸法座 修復実行委員会

お知らせ

2月14日～15日の仏婦講座で久しぶりに御講師の先生を迎えて法座でした。きれいになった本堂で法話を聞くのは気持ちいいものです。しかし一番寒い時だったので、少し隙間風が冷たく、厚着をしてこられた人も多かったようです。ストーブを修復の時ほとんど古いのは処分してしまいましたので、急遽購入しましたが、天井が高いので暖かい空気は上の方へ上がってしまい、寒かったようです。いす席も足が痛くなくて良いと、好評でしたが、足元が寒いと言う問題点もわかりました。また、外のトイレを下水の関係で取壊しました。しかし外に無いのはなにかと不便だと言う希望もあり、寒さ対策とトイレの件は、今修復委員会で検討中なのでもう少し御待ち下さい。

いま西本願寺では宗会議員の選挙が始まっています。宗会議員というのは本願寺の予算や行事を決める委員のことです。この安芸教区から3名の僧侶議員と1名の門徒議員が選出されます。安芸北組の府中の龍仙寺の御住職が立候補しておられて、住職は今その応援で忙しくしています。本願寺の宗会というのは日本の国会より歴史が古く、その形態を国会の方が取り入れたといわれています。府中の龍仙寺の御住職は総務という大臣に当る重責を負っておられます。やがては本願寺の総長になれる逸材です。今回の帰敬式でも大変力を貸していただきました。頑張ってもらいたいと期待しています。

お知らせ

第8回連続研修旅行 日時 5月10日～12日 京都・大阪・滋賀
行き先 西本願寺・大谷本廟・八尾 顕証寺・近松別院 京都御所
詳しくはまたご案内致します。帰敬式(おかみそり)大谷本廟に納骨の予定です。募集人員は四十五名の予定です。希望者は早めに申し込み下さい。京都御所の許可が宮内庁から届きました。一般参観の時は人が多いのですが、今回は時間を決めて隨泉寺だけの参観です。多数御参加下さい。

御門主様御正忌報恩講法話

今年も皆さまと一緒にご正忌報恩講をおつとめし、宗祖親鸞聖人のお徳を偲ばせていただきました。御影堂の修復工事のために、昨年からの総徹堂でのご正忌をおつとめするようになりましたが、今年からは、ご正忌などの法要の時だけ、阿弥陀如来さまと親鸞聖人さまに場所を入れ替わっていただきまして、御堂の中央でおつとめすることになりました。皆さまのご感想はいかがでしょう。さて、一昨年頃から「二十一世紀」という言葉を耳にしたり、口にしたりいたしております。世界の歴史を百年という単位で、区切って顧みることは、

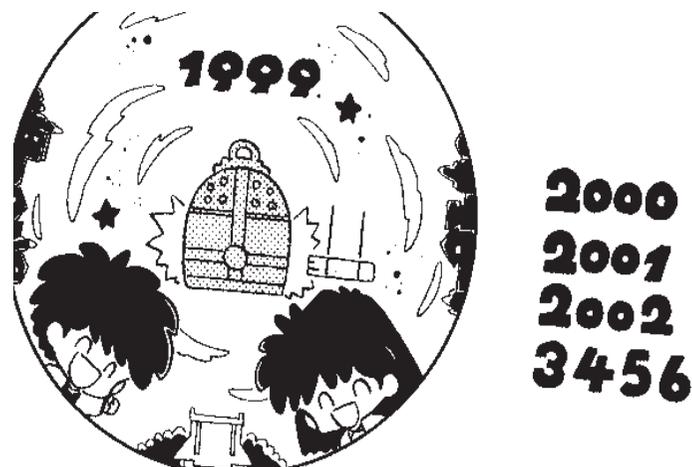
意味がありますし、また、世の中の難しい問題を良い方向へ展開していく、切り替えていきたい、そういうきっかけにしたいという切実な願いも理解できます。

しかし、仏教的に考えてみますと、世紀が新しくなったからというだけで、人間が変わるものではありません。どこまでいっても罪惡生死の凡夫であります。大切なことは、その凡夫が、真実の教えに遇って、日々新たないのちを生きてゆくことです。

世紀の変わり目だけではなく、毎日、時々刻々、新たな気持ちで、本当に大切なことを思いつつ、過ごしていきたいものであります。

なお、私たちの宗門にとりましては、宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌まで、あと十年ということも大切であります。皆さまのお寺や宗門のあり方、運営につきまして、現状を正確に捉え、み教えが次の世代に正しく伝わるようにと、しっかりとの方針を立てて進める必要があります。皆さま、それぞれの場に対応して下さるようお願いしております。

先日、京都で発行されました新聞に、ある心理学者の意見として「現代人は科学技術によって、一週間後の天気があったり、遠い外国のことも即座にわかるようになったけれども、隣にいる、身近にいる家族の気持ちがわかっていない」という意味の文章が載っており、「はっ」とさせられました。



更に付け加えますと、周りではなくて、自分自身のこともわかっていないと反省させられることです。文字や映像などの情報は手に入っても、生身の人間のことがわからない、わかりにくいということでありましょう。

阿弥陀如来さまの光があたっているのは、生身の人間、この私であり、お隣の人です。ですから、家庭生活、社会生活の中で、阿弥陀如来さまのおこころを味わうところに大切な点があります。お念仏申しつつ、日々の出来事の意味を考え、体験をそのまま終わらせず、お慈悲を味わうご縁にしていきたいものです。

親鸞聖人は、ご和讃に「如来の作願をたづぬれば 苦惱の有情をすてずして 回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり」(『註釈版聖典』六 六頁) とうたわれました。阿弥陀如来様は、南無阿弥陀仏となって、今ここにきてい



く見抜くことは易しくありません。

いのちに限りがあると知ってはいても、その通り受け入れること簡単ではありません。

正しい努力を積み重ねることも易しくありません。阿弥陀如来さまは、すでにそこを見抜いて、南無阿弥陀仏となって、おさとのり世界であるお浄土へとよんでくださるので

す。ですから、阿弥陀様の前ではわが身を取り繕う必要がありません。我がはからいを交えず、素直に南無阿弥陀仏をいただくばかりです。そこでは、私のいのちは、私のもの、私物ではなくて、阿弥陀如来さまの光を受けるいのちであります。そして、阿弥陀さまの分け隔てのない光を仰ぐとき、すべてのいのちあるものが、その光の中にあることを知らされます。お念仏申しつつ、いのちの大切さを思い、身近なところから行動に移してまいりましょう。

平成13年(2001)1月16日

文責 住職